

## 英語の文字指導における小・中の接続：「気づき」から「学び」へ

次期の学習指導要領では、小学校3・4年生で外国語活動が開始されるとともに小学校5・6年生で英語が教科として導入される見通しである。これにともない、現在は中学校から行われている「読む」「書く」活動が小学校でも開始される。現在附属小・中学校でもアルファベットの導入と音声との対応に関してさまざまな取り組みがなされているが、小・中接続の観点から留意点を整理したい。

### 小学校での「気づき」

アルファベットは私たちの日常生活の中に深く浸透しており、普段特に意識することなく使っている。しかし、初めて触れる子どもたちにとってはさまざまな気づきがある。例えば、アルファベットに大文字と小文字があること、縦書きをしないこと、単語と単語の間にスペースを空ける「分かち書き」をすることなどは、われわれが想像する以上に新鮮な驚きかもしれない。また、日本語のひらがなとカタカナには読み方が一つしかない（「あ」という文字には「あ」という読み方しかない）のに対して英語のアルファベットでは同じ文字でもいろいろな読み方があることは、日本語のローマ字表記と英語の違いを認識する上で大事な気づきである。このような「気づきのポイント」は、子どもたちがつまづきやすい「指導のポイント」でもある。

小学校でアルファベットを導入する際には、このような子どもたちの気づきを大切にしながら、以下の点に留意したい。(i) 文字から単語、そして文へというように、英語の表記を段階的に導入すること。こうすることで、ひとつひとつの文字の形の認識、文字と音との結びつき、また文の構成要素として使われる際の分かち書きのルールなど、各段階における気づきのポイントを焦点化して指導することができる。(ii) 店の看板や印刷物など、実生活でみかけるアルファベット表記を教材として活用すること。これまで単なる意匠としてしか意識してこなかった身近な英語表記が「読める」ようになることは、子どもたちにとって大きな喜びであろう。そのような体験を与えることで、英語を読んだり書いたりする活動に対する主体性を育みたい。

### 中学校での「学び」

文字と音との結びつきに関しては、小学校の発達段階では特にルールを教えることなく、各単語の読み方をその場その場で提示するやり方が適しているように思われる。小学校で個別の事例に多く触れた後、抽象的思考力の発達する中学校で綴りと発音の対応関係の決まり（フォニックス）を導入することが望ましい。つまり、フォニックスは演繹的ではなく帰納的な指導に向いているといえる。今後、小学校3年生から6年生で外国語活動・英語の時間数が増えれば子どもたちはそれだけ多くの単語に触れることになるので、中学校でのフォニックス指導はより効果を発揮するかもしれない。ただし、他の文法規則と同様にフォニックスも「実際の運用のための補助輪」として活用し、過度の厳密性を追求すべきではない。

中学校段階で綴りと発音の対応関係を理解することは、子どもたちが主体的に英語を学び続けるために大変重要である。また注目したいのは、フォニックスの知識は未知の単語を初見で発音する「綴りから音へ」という方向だけでなく、音声を文字として正しく再現する「音から綴りへ」という面でも力を発揮するという点である。たとえば、口頭でのコミュニケーションにおいて未知の単語に遭遇した場合、フォニックスの知識があれば聞き取った音を手がかりにして綴りを推測し、そこから辞書を引いて当該の単語の意味にたどり着くことが可能となる。

小学校ではさまざまな「気づき」を大切にアルファベットの導入を行い、その蓄積に基づいて中学校での語彙の「学び」につなげていくことができれば、文字指導・語彙指導を通した小・中の連携が可能になる。

(共同研究者：島根大学教育学部言語文化教育講座、縄田 裕幸)